

### 第3回大田区立図書館の今後のあり方有識者懇談会会議録

会場 区役所本庁舎 202 会議室

日時 平成 29 年 9 月 27 日 火曜日 午後 2 時開始

出席者 委員 8 名 区教委出席者 5 名

大串座長：【開会宣言】【傍聴人入場の許可】【注意事項】

大串座長：【議事録の確認】【素案の確認】

山中大田図書館長：【素案の修正点の説明 第3章まで】

秋山委員：素案 P37 認知症予防に本の読み聞かせ云々の部分、お年寄りに本を読み聞かせるということも非常に大切ではあるが、他に認知症予防について、お年寄りもボランティアになって子ども達に本の読み聞かせを行うことで認知症の予防や改善を進めるといボランティア事業もあり、それは効果が認められている。取り組むとよいと考える。赤ちゃんや小さい子供のお話会の運営にもお役に立つだろうし、認知症予防という点では両方の面から考えてはいかがか。

大串座長：たしか鳥取大学の医学部の先生が書いた本で、音読の効果について、高齢者の方々が一斉に声を出して本を読む。これがいい。音読が認知症予防に効果がある。鳥取県立図書館はその成果に基づき、20 セットずつ関係の大型活字の資料を買って、高齢者の施設に持って行って、みんなで一斉に声を出して読むことを勧めている。

オランダは 50 歳以上の人に子ども達に本を読むボランティアになるよう国として進めている。いまの秋山委員のお話を聞いても、高齢者の生きがいといった点からも大田区でももっと推進したらいいと思う。

庄嶋委員：素案は前回の懇談会で話した部分をずいぶん加えてある。P34、P35 に、社会教育団体という言葉が出てくるのは図書館なので理解できるが、大田区が進めている地域力という政策の意味では社会教育団体という幅が狭いと前回指摘させていただいた。今回の素案では区民活動団体に変えていただいている。それ自体はいい。だが P35 の 3 段落目、区内の区民活動団体は 2000 団体で推移しておりとあるが、この団体数は恐らく P36 の表 23、区内社会教育団体数の推移をデータにしたものと見える。これは社会教育関係団体の数字である。区民活動団体となると自治会町会等を含んだ数字となるので、ここは誤解を与える書き方になっている。「区内の区民活動団体のうち社会教育関係団体は」などと留保した書き方にしたほうがいい。

眞坂委員：P21、P28 の図書館資料のことについて、区内の郷土資料を強化させるとある。調べ学習をするために郷土資料を集中的重点的に集めたり、コーナーをわかりやすくしたり、利用者にとっての使いやすさを目指していくことを取り入れてほしい。P21 では「勝海舟コーナー」「馬込文士村コーナー」があるということだが、各図書館でより一層郷土コーナーの様に強化していく必要がある。

小原委員：地域の久が原図書館では郷土コーナーで展示をしている。その時に集まった資料、文献もあるが写真だとか、個人で持っているメモ書き程度の資料、図書館毎に地域性があり調べる目的によって差が生じるが、そういった手持ちの資料を公共化する手段を考えている。郷土コーナーの展示をしながら終わった後の資料の整理、その後区民から要望あった時にどう提供したらいいか模索中である。自治会・町会関係なく地域の図書館を中心にして、そういったグループを作ったらいいか、郷土博物館との連携をどうすればいいか。素案に反映する具体案は持っていないが、資料の保全・管理について。P39、P40、資料の公開について書かれているので、手持ち資料をどうやったら保全・公開できるのが課題である。地域特性のある資料を収集するチームを図書館の中に作ってもいい。

眞坂委員：地域の方がお持ちの資料を一つの場所に集めて閉鎖してしまうと情報の共有ができず資料が死蔵されてしまう。より地域の方に理解を深めていただくためにも共有化して情報共有していく。博物館にも情報共有しながらお互いに公開していくことが必要。

大串座長：ヨーロッパは印刷技術がなかったころ、紙がなかったから文献の数が少ないが、日本は古くから紙があったから識字率が極めて高かった。フランス革命の時のフランス国民の識字率は26%、日本の場合識字率は幕末で50%、知的な国を造った。ひらがなをみんな書けた。江戸時代の後半になると識字率は首都圏ではほぼ100%であった。だから町の人が日記を書いている。庄屋とかは自分で記録を残している。それが膨大にある。大田区でも古い蔵とか屋根裏から引っ張り出してくると、古文書館がいくつも建つように、非常に多くの文献があつて、旧東京市内はあまりないが、大田区は近代の文献がいろいろ残っている。そういう日記は神田の古本屋に並ぶと意外と高い。買い集めているマニアがいる。近世の文献の中で値上がりしている中に「自習用の本」がある。寺子屋が終わった後は二宮尊徳の様に、町を歩きながら勉強していた。昔は自習用の本は神田の古本屋でも二束三文で取り扱われていた。最近ある本が10年前ぐらいに出版され、それ以来研究が進んで高騰した。それから教科書、これが値がついてきていて、どこの自治体でも頭を抱えている。

図書館では持ち込まれた郷土資料はデジタル化をして、現物は返却して、デジタル化したものを整理して、ディスクの中に入れて保存しておこうという動きはある。課題として捉えていく。地域資料は素案の第4章でお話いただく。

大串座長：人口に対する利用登録率が10年くらいのうちに33%から25%に落ち込んできている。登録者一人当たりの貸出冊数は増えている。一部の方だけでなく区民の皆さんに図書館の本を活用していただく方法について、素案の第4章で今後についてきちんと書き込んだ方がいい。今日はこの今後の在り方を重点的に話し合いたい。

山中大田図書館長：【素案の修正点の説明 第4章から】

大串：P37以降じっくりご検討いただきたい。この素案は「基本的な考え方」「施策の体系」及び「個別事業案」と3つに分かれている。今日懇談会で話していただくのはこれからの図書館のことなので、この項目によらず、小さな事でもいいから何でも言っていただいて、発見が記録に残るので今後の図書館の運営を進めていく上で、発言を切っ掛けに図書館運

営が変わり、サービスに示唆を与えるものとなる。いろいろとお考えを述べていただきたい。

座長として、素案の区立図書館の基本的な運営のあり方が慎ましやかな記述になっていると思う。IFLA の公共図書館のガイドラインで各国のいろいろな事例が紹介されており、例えばフィンランドの公共図書館の構想によると、図書館とは人の力になり、社会の力になり、地域社会の形成に貢献し、人の成長を支えるというインパクトのある表現が掲げられている。図書館は地域社会に非常に貢献していると書いてある。それと比較すると素案の表現はあまりにも慎ましやかすぎる。今後のあり方については、本来公共図書館が果たすべき力、役割を強調した書き方をした方がいい。図書館は地域社会にいろいろな形で役に立っている。個人が本を活用していろいろな事に取り組むことによって、地域社会の活力を生み出している。新しい地域社会づくりに役立っている。社会的に視野を広げた形で図書館の役割をきっちりと、こういうことで役に立っているという表記で書くべきだと思う。日本はこれまで伝統的に地域で何かやるとか、地域住民との関係もあまり作ってこなかった。ただこの素案は今後のあり方を示すものだから。今の日本の図書館を巡るテーマが3つあり、一つは地域、地域との関係を今後公共図書館がどう作っていったらいいか、地域に公共図書館がいかに関与するか。もう一つは情報、情報化社会が進んでいるので、沖縄サミットでも問題となった情報格差の是正に、公共図書館が大きな役割を果たせるのではないか。あと一つは情報化社会が到来するので、そこで読書を通じた人づくりを進めるということ、本を読むということが人間の成長にとって重要なことなんだということ。自ら調べるということ。本を読むだけではなくて、地域社会に根差して生きていく人間としての学びを含めた自ら調べる力を付けていくということ。情報リテラシーとの関係もあるが、もっと積極的に地域で、主体的に生きていくひとりひとりを支援していく。地域社会の中ではいろいろな本をいろいろな方に活用していただく。そのあたりをもう少し書いたほうがいい。

さっき指摘したように、他の自治体でも登録者が、極端なところは10年間で15ポイントぐらい減っている。貸出冊数は横ばいか減っている。日本全体で貸出冊数が増えているのは新しい図書館が出来ており、この近くでは武蔵小杉にある川崎市立中原図書館、ここは猛烈に貸出件数を増やしている。大田区は非常にいい図書館づくりを進めてきたのだから、その特色を活かしていくといい。大田区の図書館は地域で分担収集を行っている。分担収集をしている特性を活かして、分担している資料の領域で積極的に展示とか本の紹介をして、それは単にその担当図書館に留まらず全館が共有する。お互いに、少なくとも月に一度は本の紹介リーフレットを出してほしいと考える。

事務局から児童の本が多くあるという説明があったが、本が多いという特徴を活かしてできるだけ沢山の区民の方々に本が渡るような仕組みを考えてほしい。

あと一つは地域資料。大田区はいろいろな地域で特徴のある地域づくりをしてきた。羽田の有名な穴守稲荷神社で、明治の資料を見ると鳥居が並んでいて、江戸の人たちを集め

ていた。江戸から来た人たちが記念の物を残したり、継承されたりした物が残っている。近代になってそれぞれの地域でそれぞれの発展を遂げているわけで、地域性を踏まえたら資料の収集と活用を考えたほうがいい。地域の資料の保存の問題、デジタル化の問題、これらは図書館員の整理などの能力を活かしてやっていただきたい。

野末副座長：前回の我々の発言を上手く取り入れていただいていると感じる。具体例が多く記載されておりわかりやすい。後段については大串座長と同様な印象を受けている。これだけ頑張っているんだからもっとかんばるよ、という所を出してもよいのでは。例として P38 (1) から (4) まで、図書館はこういうことをしましょう、といった事が書いてある。正しいが、もう一步伝統的な図書館の枠を超えたこともやるよ、といった大風呂敷があつていい。ここにはまだ見えていない課題といった、地域のニーズについて、「区民ニーズ」といった言葉が出てきて推進しましょうと書いてあるが、もっと積極的に探しに行つて、ニーズを課題として発見して、それに対応した資料の配置とか、新しいサービスとか、極端な話、図書館で待っているレファレンスではなくて「出張レファレンス」みたいなものをあちらこちらでやるような、そういう舞台を新しく設置するとか。そのくらい積極的に図書館のサービスを使って地域あるいは個人の課題を見つけて解決していくということを、伝統的な図書館サービスの枠を少し超えたようなこともどんどんやっていきます、ということがあつてもいい。そこで前段のところで、図書館としてやるべき項目が書いてあるが、何のためにやるのかを書くべき。大串座長が先ほど仰った P38 の一行目に少しだけ書いてある。「生涯を通じて心豊かな生活を送るため」と。もう少し細かく書いていい。区民の教養とか、それぞれサービスをすることにより子育てで孤立していた保護者が助かるとか、子供たちが学校以外で勉強する場所があつてとてもいいとか、先生達の労働時間が減つて助かるとか、様々な団体が活動することによって区の産業が栄えるとか、どんなことでも構わないが我々の生活がよくなる、問題が解決する、マイナスをプラスにする、プラスをもっと伸ばすといったことが図書館の目的だと考える。本は大事だが本自体が目的ではなくて読書は手段である。これらを書いていくとよい。素案のどこかにレファレンスを受けてこんないいことがありましたという記載があつた (P27)。これはものすごく大事なこと。レファレンスサービスの件数を増やすことが目的ではなく、レファレンスサービスをうけてこんないいことがあり、区民の皆さんの問題が解決したとか、より良い生活ができるようになったとか、お金がもうかつた、何でもいい。具体的な例が大事であり、とりもなおさず図書館がやろうとしているところはそこ。情報提供することが目的ではなく、手段で行くということを最後の所で、これは今後のあり方なのだから、大風呂敷をひろげて大上段に構えてもいいと考える。

もう一つ申し上げる。全体を通して本、書物、図書、書籍と4種類表現が出てくる。ここは整理をしてきちんと使い分けるとよい。その上で、P38 の基本的な方針で「本」を強調している。たしかに図書館は紙の本が中心であるが、それは多分図書館の象徴であつて、実際はダイジーを使うとか、絵本を読むとか、データベースを使うとか、デジタルデータ

を使うとかいったことを含めて「本」が象徴していると考え。そういう意味の「本」であって、読書の多様性、情報の多様性といったものはどこかに述べておかないと「図書館は紙の本だけ置いておけばいい」と思われる。

庄嶋委員：私も、実際図書館を利用することで何が起きるのだろうか、というのが大事であると考え。子育てをしている立場としては、子供の夏休みの調べ学習があり、調べることは教育上大事だろうと考える。中学生の子供の夏休みの宿題を一緒に考えていたのだが、今は統計情報を含めてインターネットでいろいろな情報が手に入る。親も忙しいのでネットで手に入る情報をうまく使いながら、それをグラフに表すといろいろな発見がある。そんな楽しさを子どもと分かち合っただけ面白かった。教育課程の中で図書館に足を運べばもっと面白い発見があるよ、というのがあるとなおいい。

話は逸れるが今年中学校制度ができて 70 周年で、私が PTA 会長をやっている中学を含め、大田区内でも 16 中学校が 70 周年を迎えていて、3 年生向けに地域の立場で特別授業を企画運営した。学校の沿革史をひも解いていろいろ発見したことを子供たちに知らせる授業を行ったが、調べることは大人にとっても面白い。ひも解いてみると新たな発見がある。これを何らかの形でいろいろな人に伝えていきたい。ビジネスなど実利的に役に立つことがあればわかりやすいが、地域活動のなかで、あるいは子どもの学校に関わったりする中で、「調べて発見することは面白い」ことを伝えたいとおもいつつ、素案にどう反映していけばいいのかわからないまま漠然と考えている。

眞坂委員：調べ学習に関して、地域資料は古い資料が多いので、その取扱いはどうなのか。博物館では古い資料は保管する。図書館では複製本にして公開することにより活用している。これから双方向的に情報共有しながら、具体的にどうやるか詰めなければ。P40 にデジタルアーカイブの構築につとめるとあるが、国会図書館のデジタルアーカイブがホームページで出されている。大田区でも具体的にアーカイブを、館内だけで見せるのか、インターネットで公開するのかを具体的に考えて詰めていかなければならない。博物館でも同じ様な問題を抱えているので区の中でも足並みをそろえて対応していかなければならない。

吉原委員：中学では地域の防災力の話の中で、災害時に生徒が地域の力となって働くことを教えるが、地域社会の中で生きる人間を育てるということで、本を読むことや、図書館の事業の中で子ども達を育て、その子ども達が将来地域の為に役に立って地域を育てていく。いろいろな意味でこれからの社会を作っていく人間を育てていく。そのいろいろな場面で図書館が関るといいと考える。

素案に図書館メールカーの活用により、メールカーが学校を回って、学校の図書と公立の図書館とが連携し、学校の図書館で子ども達が本を検索して、子どもの ID で申し込めて、図書館から借りられるということをぜひ実現してほしい。子ども達の読む読書量は、子どもの時期が一番読むと思うので、できている自治体もある。そして活性化して子供の読書量、小学校のうちから ID カードを持って、その ID カードで小中学校から申し込んで借りられるという社会を作っていくことが、これから先登録者の数や読書量を増やしていくこ

とに繋がる。子どもが小さい時が一番本を読むと思う。就学前に読み聞かせ等で本を読む習慣を付けて、そこから ID カードを作って増やしていくことがいい。

甲斐委員：【11月1日開催の研究発表会の案内資料の情報提供】読み聞かせ、読書学習司書、学校支援事業を活かした図書館司書による発表あり。ぜひいらしてください。

素案の P41 (2) 学校保育園幼稚園との連携強化について、区立図書館の今後の在り方なので、できるかどうかは別として、夢をもっとたくさんということを書いていただくのがいい。素案を見ると今やっていることをなぞっている。メールカーが学校に来ていただくことが第一希望ではあるが、前回の懇談会でも「調べ学習」「自ら学ぶ」をキーワードにしたときに、科学的読み物や、調べ学習に必要な、児童室以外の一般の書棚にも子供が読める本がある。その本へのリンクの方法について、児童室だから（日本十進分類法の）9類と図鑑置いておけばいいという考えではなく、子供たちもそういうところに行けるような案内の方法を工夫してほしい。

書籍、インターネットのどちらが良いでなく、両方の長短所を知って、図書館はメディアセンターであるべき。もちろん9類の読書をするともあると思うが、ネットの情報の把握と、書籍からの情報を上手くコントロールしてバランス良く身に付けられる子どもを育てたいと考える。どこかの場所にパソコンがあって、(児童用百科事典の)ポプラディアのポプラネットというサイトがあり、そういった事ができるコーナーがあるといい。それらを指導できるスタッフが図書館にいて、定期的に使い方を教える時間帯を設け、お話会と同時に小学校中高学年から中学生を対象にした時間帯で教えてくれたりすると大学に行ったときに自分たちで学ぶことができるのでよい。小学校にも課外授業で図書館司書が教えに来てくれるといい。

秋山委員：大田区のような都会では物理的に無理かもしれないが、居場所としての図書館はどうか。赤ちゃんとおかあさんが、夏休みに児童館が学童の子供でいっぱい居場所がなく、図書館に集まる。その時図書館では、子供が騒いではいけないのが基本。図書館では静かにするのが基本だが、もっとゆったりした場所があって、赤ちゃん、子どもと幼児が本を通じて触れ合えるような場所があるとか。親子で調べものをするといった、親子でワイワイ調べられるような場所。中学生が互いにしゃべりながら、本を通じていられる場所が理想なのかなと。せつかくそこに本があるなら、図書館は他人に迷惑をかけてはいけない場所というイメージが強いが、もっとゆったりと過ごせるという意味では部屋という物理的な意味で充実していただかなければならない。そういう場所があることで、そこでお話会ができたり、ボランティアが居られる場所があればいい。

小原委員：素案 P43、区民施設へのサテライト図書館の設置とある。これは是非お願いしたい。田園調布地区には図書館が無い。田園調布特別出張所が改築を検討中。サテライトの第一号としてぜひここに設置してほしい。少し広めに、図書館ほどのスペースは取れないと思うが、サテライト機能を持たせることで、大田区内にある全図書館の図書が利用できる。メールカーの充実も絡めて、図書の貸し出し、利用が多少時間がかかるとしても手

近なサテライトで利用できるようになる。ぜひこれは実現していただきたい。ある規模の図書館を設置するとなると、それだけの用地、スペースを取得する必要がある。区の施設を図書館コーナーとして充実できる方向に行っていただくとよい。その他の地域でも、他区との境になると交通の便も悪い、あるいは施設の利用が不十分だと。サテライト機能の充実を要望します。

大串座長：すぐ実現できるものと、研究課題にさせていただくものとある。

庄嶋委員：大田区は学校支援地域本部といって、小中学校にコーディネーターを置いて地域の方々の活力を活かしている。夏休みにサマースクールとして地域の方や保護者が先生になって、日ごろの学校の先生とは違った授業を行っている。ただ、小学校と中学校では子供に対して保護者ができる活動の内容が異なると感じる。小学校では楽しいイベントをやれば子ども達は喜んでくれるが、中学生はそう簡単ではない。そういった中で逆にある程度成長したからこそその取り組みとして、調べ学習のレクチャーを、研究職の仕事をしている保護者がやってはどうかと思う。夏休みの始まりの時に特別授業のような形で、調査ってこういうふうにやったら面白いとか、このデータをグラフに直すにはこうやるとか、そういうレクチャーをしたうえで調べ方はこうだとか、図書館に行ってみるといろいろな発見があるとかを伝えていけるといい。私も調査関係を仕事の一つにしているので、今後できるかなと考えていた。当然図書館そのものに頑張ってもらわなければならないが、地域の力、保護者の力、我々が動くことで図書館に繋いでいくことが可能ではないか。

もう一つ素案に出てこない視点として、大田区は地域力と並んで国際都市を標榜しており、観光に力を入れている。観光資源としての図書館は素案にはない。国内外で図書館を売りにしている都市は存在する。私自身、出張の際にその土地を理解しようとした場合によく博物館に行くが、場合によっては図書館に行ったこともある。その場合は真っ先に郷土図書のコーナーに行く。その土地の事が分る書籍、資料がある。そういう意味で観光的な視点で図書館を訪れた人におもてなしする、その土地の事を理解するきっかけになるコーナーという視点があってもいい。他の委員に事例を伺ってみたい。

大串座長：情報デザイン学は観光業から始まって、ある時期からパリに行く人でも、定型的な観光コースに行く人と、例えば一週間パリに滞在するが、三日間は観光コースで行くが、後の四日間は自分の趣味だとかテーマだとか、やりたいことに合わせて自分で組み立てていきたいという要望が増えてきた。その結果地域の社会、パリならパリの中で、自分で観光資源をデザインして、自分で観光コースを作っていけるようなことをサービスとして始めた。そこで情報デザイン学が始まった。日本では地域の中に浸透しない。高知県はりまや橋に図書館を作る際に私が座長を務めたが、そこに観光協会はあるが定型的な観光コースで、むしろ高知に来た人が生活を体験したいとか、外国人が多く訪れるがそういった個別に体験したいとか、いわゆる観光とは外れたようなところでいろいろとやりたいといった方々のために、図書館の資源を使って積極的に図書館が案内をすることをやったほうがいいのかということも図書館構想の第一に掲げたものを作成したことがあった。大田の

場合は羽田空港とか観光資源がいろいろある。観光資源から少しトーンダウンした、大田区に来た人がちょっと滞在した時にもっと大田区を知るとか、大田区を知りたい。大田区で作っているいいものがたくさんある。大田区の物づくりを知りたいとか、そういうことを考えた人は図書館に行っていていただいて、それぞれの図書館でご案内する。そういった地域の観光デザインできるような、一人ひとりが訪ね聞かれてもできるようなところまで図書館が手を伸ばすべきだと思う。それは単に大田区を訪れた方だけではなくて、地域に住む方々が地域のことを知るために、こういうコースで歩いたらどうでしょうか、高齢者が健康の為に歩くのに役に立つ。高齢者が歩くことはいいこと。自治体によっては一週間に二回、20分歩くことを推奨している。そういった自治体と他のやっていない自治体を日本テレビが奈良県で比較していた。歩くことをやっていた方が介護保険料が安くなる。特養に入る方の数が圧倒的に少なくなり、地域の中で活動する数が多いとしていた。図書館は単に図書館だけ孤立したところではなく、地域と結びつきながらいろいろな事ができるものを持っている。そういったものを積極的に活用する視点を図書館が持つ必要がある。最近文科省が生活で支援を受けている家庭の子ども達をもっと本に親しませる必要があると言っている。支援を受けている家庭とそうでない場合に、子どもの読書量に違いがある。子どもの読書量を増やす必要がある。そういった家庭の為に地域の公共図書館が力を尽くしたらどうかと言って、新しいプロジェクトを立ち上げてやっている。東京は支援を受けている家庭の数が多。福祉国家論というのがあって、それでは日本の場合は地中海型で、女性の社会的地位が低くて離婚すると途端に子どもの貧困が始まる。そして年寄りが頑張る社会である。つまり保育のサービスのレベルが低い。北欧型というのはそうならない社会。中部ヨーロッパ型（ドイツ型）というのは、若者がブラブラしている社会。なぜかという、昔のギルド性が残っていて、親が仕事を辞めると自分の子どもを働かせる社会。北米型は格差社会。

野末副座長：今の話の中に「地域力」という言葉が出てくる。図書館が住民の皆さんに何かを提供します、というのではなくて、住民のニーズを踏まえた、住民のアイデアを頂いて、あるいは時間、体、お金をいただいて一緒に作っていきましょう、というところだと考える。「地域力」という言葉も出てくるので、もう少し地域と一緒に図書館を作るという視点があるとよい。素案 P43 に「区民ニーズを踏まえた図書館運営」第一点目の「図書館運営協議会の設置」は区民ニーズを把握するためにとっても大事だと考える。だがそれ以外も大事で、こういう場だけではなく図書館が建物の外に出て行ってニーズをつかみに行く。

区民も図書館にニーズをぶちまけに行く。そういったもう一段積極的な、ニーズをつかみにいくのと渡しに行くことが素案に入るといい。地域には行事、団体、イベントがあるわけだから、タイアップ、連携といったことを書いていくといい。

区民ニーズをつかむだけでなく、アイデアとかお金とか体力とか人材とか、図書館を場にして一緒につかみに行く図書館側の姿勢があっている。地域も図書館でこういうこと



をやらせてくれよというのがあるといい。書いておくと必要な時に必要な人が集まって、ボランティアでいいからこういうアイデア出しの会議をやりますよと、そういうことができるかもしれない。

広報は大事。素案の中で登録者数が減って貸出数が増えているところが気になっていて、図書館が世の中で不要になったわけではなく、どこでもそうだが図書館に行ったことがない人、図書館を知らない人が増えている。社会教育施設も同様。どこにあるか知らない。いった事がない。行ってみたら、こんなに使えるのだと気付く。ミスマッチが起きている。広報で情報発信というのは大切だが、来ない人は来ない。解決策の一つとして、なかば強制的にでも図書館を体験してもらおう。大学ではこの本について図書館で調べてくるという宿題が出せる。大学の図書館のデータベースで、すごくいいのを入れた。これが使われない。いくらいいデータベースだと言っても使わない。どうしたかいうと、コンテストをやった。このデータベースを使って新聞記事、雑誌記事を作ろうと。いい作品が出来たら商品化するとした。商品化するのは図書館ではなくタイアップしている企業。データベース屋さんとか、使ってほしいのだから。それをやったところ皆さんが応募してくる、データベースの利用率が増える、使ってみるとこれは素晴らしいとなり利用者数が増える。使ってみて利用しない人はしょうがない。利用者の1～2割はいる。何かの形で使わせてみるということが大事。公共図書館的に言うと体験型のイベントとなる。情報発信だけでなく仕掛けていくというか、とにかく一回使ってもらおう切っ掛けを作る。学校の先生と連携すれば小中は比較的簡単にできる。もう一工夫入れて、先生から言われたから図書館に行くのではなくて、子ども達が面白がって楽しんでやるような。実際にやってみて良かったという事業があるといい。何か作るためには調べる必要があり、調べるツールとしてデータベースを体験できたら意味がある。それを図書館だけでなく地域の皆さんとタイアップして開くと地域の発展にもつながる。こればたぶんできる。今まで3回の懇談会での話を伺うと相当できるだろうと考える。

キーワードとして話に出てきた「生涯を通じて心豊かな生活を送る」。私が思いつくのは「学びと成長」「地域と発展」これだと納得していただけると考える。

大串座長：保護者について、上田の図書館では情報職をやっていた方に図書館に来ていただいて、情報検索のレクチャーをする、SNSの使い方を教えるということをやっていた。国によっては公共図書館で保護者を含めて情報倫理のレクチャーを行っている所がある。僕がアメリカに行った時に、児童室にコンピューターがずらっと並んでいて、そこは保護者がちゃんと子供に教える。そのためにきちんと保護者にレクチャーする。非常に細かく考えられていた。日本の場合、今の課題は情報倫理で、ネット上のサイトを調べてみると35%は社会的に問題があるサイトである。これにはまると困った状態になる。ネットの情報リテラシーについては地域の中で誰がやるのかと言えば図書館ではないかと僕は思う。もう一つはオープンアクセスの課題。1995年、ブルッセルのG7情報閣僚会議で取り組まれることになった11のプロジェクトのうち、電子図書館プロジェクト幹事国だったフラン

スでは、ヨーロッパのセンター図書館になろうということで、オープンアクセスのデータベースを作って、3000万件アクセスできるデータを作っている。その中には日本の資料が北斎の浮世絵を始め多くある。遅れている日本でも最新の学術雑誌だとかは使えるようになっている。いろいろな国のレポートとか、特別法人のWEBだとか増えていて、国会図書館でも巨大なデータベースを作ったが、そういったことはほとんど住民の方にはわからない。そのようなデータベースは本と一緒に活用するのが基本である。そういったことを図書館でこまめに住民に活用していただいて、レクチャーを、別に図書館員がやる必要はない。情報関係を仕事で使っている方がボランティアでやっていただく。素案のボランティアも読み聞かせに限定されているが、もう少し広げていただいて、区民のいろいろな力を図書館で発揮していただく。子ども達に教えるのも学校を退職された方に参加いただく。

もうひとつ素案に不足しているのは、中学生高校生に対するサービスがない。子どもと大人をつなげる本、ただ日本の場合本数が少ない、いわゆるヤングアダルト向けの本数が少ない。ある文化審議会の答申に書いてあったことだが、年間百何十冊しか出版されないと。それほど少なくはないと思うが。日本の場合、先進国の中で出版全体に対し児童書の割合が少ない。それは住民の関心が低いから。それに輪をかけて中学生高校生が読む本数が少ない。それは関心を持たないから。大田区の図書館でも図書館の中に中高生向けの本のコーナーをきちんと作るべきだと考える。日本の公共図書館の場合、文部科学省が過去に調べた数値では中高生向けの本のコーナーを備えている図書館は全体の25%しかない。作った方がいい。中高生向けのコーナーを作ったら小学生も上のレベルの本が読めるし、中高生もそれを見ながら大人の本を読むことができる。

小原委員：ボランティアについて、素案には図書館の中でのボランティアが書かれているが、図書館を中心に地域の街歩きのガイドの育成をボランティアとしてやりたい。キーになる、例えば自治会が中心となってNPOを作ってやるのがいいのか、外から来た人たちにこの地域、こういういいところがあるよ、見どころがあるよというのが地域の人も意外に知らないのが実情。図書館の中に地域の見どころのコーナーを作るのもひとつだが、その図書館の周辺をガイドが中心となって歩いて、ファンを増やしていく。そのファンの中から新しいガイドが生まれてくる。一つの図書館を中心にして隣の図書館と。調布地区の街歩きガイドの養成講座を図書館でやって、それに対して認定書を図書館が発行する。図書館がそういう機能を持ってもいい。特に羽田地区。穴森稲荷神社、新しい空港と全く新しい現代とのギャップが大きい。歴史ある穴森稲荷神社を知ったうえで外国から来た人達にPRできるようなグループ・ボランティアが図書館を中心にできると、外国との交流も密度が濃くなっていくのではないかと。

大串座長：僕が勤務していた大学ではアメリカの大学でも教えていたが、日本の学生は自分の育った地域の事を知らない。アメリカの学生は日本の学生に聞く。あなたの育ったところにはどんな話があるとか、昔話を話せとか聞かれる。話せなくて。大田区の図書館に

は昔話の本があって、もっと地域のいろいろなところで取り上げていただいて、地域の昔話から地域のいろいろな事を知るということを区全体でやらなければ、国際社会に出ていく大田区で育った子供たちが困ると思う。大人たちが関心を持って話題にしなければならない。図書館学を教えていて、小学校 5 年までに自分が印象に残った話にどんな話があるかということレポートに出させる。都会の学生は「ぐりとぐら」とか。中に時々おばあちゃんに聞いたお話がレポートに出てくる。それは地方出身の学生で地元の話である。学生の中には非常に地域に対する愛着を持っている地域がある。金沢から来た学生は、東京は人の住むところではないという。私は金沢に帰ると言って帰って行った。そういう地域に対する良さを地域で教えている地域の学生は地元に戻る。だから富山とか静岡は帰る。そういったことが重要。大田区は歴史的にも東海道線を作ったとき品川区では反対したので土手を作って走らせた。大田区では陸上を走らせたのだが藁葺き屋根で蒸気機関車から出る火の粉が飛んできて火が付いた。4～5軒は明治政府が保障したがどんどん火が付くのでそれ以降保障しなかった。これが全国的に知れ渡って、鉄道は旧市街を通さなくなった。上田では千曲川の河原に鉄道を通した。あれは上田の上の方を通す予定だったのに皆反対したからだ。大田区は東海道だとか鎌倉街道とか通っていて、梅だとか植物があって有名な地域だった。今でも池上地区には梅園が残っている。大田区は素晴らしい産業地域を持っている。もう少し地域資料についてそれぞれの館が特色ある、自分の所だけで考えないで、積極的に図書館で取り上げていただいた方がいい。墨田区に工場団地を作って大田区からも移す案があった。この話があったとき大田区は反対した。地元で産業を残さないといけないということで。大田区の産業は、町工場と呼ばれているが、地域との兼ね合いで残っている。モノ作りは単に自分の工場だけでなく地域の人たちとの関係で作られている。そういったところは残したほうがいいということで大田区は反対して、地域の中でそういう産業を育てていった。それが今の大田区に繋がっているので、そういったことを子ども達にも地域の人たちにも知っていただいたほうがいい。この話は小説になっているが。

眞坂委員：地域力に関して、郷土博物館であった話だが、馬込小学校の先生がこの地域を歩きたいので郷土博物館の学芸員にレクチャーしてほしいという話があった。その時に学芸員がレクチャーして 10 人くらいの保護者が馬込の地域を歩いた。そのとき保護者が積極的だった。子どもが親から話を聞くのと学芸員から話を聞くのでは受け取り方が全然違う。地域の良く知っている方が話をするのはいいこと。図書館や博物館で皆さんにレクチャーをしながら学びながら機会を設けて、町に出ていくということが必要である。

あと野末副座長の体験型という話。今年郷土博物館では博物館探検クイズをやっている。小学生対象に博物館の中を探検しながら 6 問クイズをやった。すると昨年より子ども達の入館者数が増えた。図書館でも図書館ならではのアイテムを使って子ども達を巻き込むことが必要。

野末副座長：大学図書館でも脱出クイズが流行している。図書館に行って問題を解く。謎

解きをしながら脱出できるか。結構難しい。いつのまにか図書館の使い方が分ってユーザーになる。

眞坂委員：子ども達も資料がどこにあるか知らない。子ども達が見つからなかったと言ったら、難しかった？もう一回見てごらんと言っていくと、サラッと見て帰る子ども達が多かったところに、一つひとつの資料どんなものだろうというのを見て帰るといことが増えてきたので、滞在時間が増えた。景品として博物館で作っているシールをプレゼントすると喜んで、シールがほしくて違う日に来て何回もクイズをやるリピーターもいた。そういった子ども達が増えてくると利用者が増える。

野末副座長：夏休みに親子でやったらウケる。図書館を探検しましょうとなる。

先ほど秋山委員がおっしゃったが、図書館は静かにしましょうというのがある。一日親子デーを作って、その日は図書館の中がにぎやかでもいい。その親子が図書館を探検して使い方が分ってユーザーになってくれればいい。他の利用者には1日、2時間だけ我慢していただいて。そうやって仕掛けていくと、一回使えば分る。博物館にはよくいるが、リタイアした方。ボランティアの方がいる。お台場の科学未来館、あそこにニュートリノでノーベル賞取った小柴先生のカミオカンデの模型がある。そこのボランティアのおじさんに話しかけてみたら、実はこれは私が作ったという話で、技術者で博士号を持っている方がボランティアをやっている方がいて、延々と語ってくれた。

小原委員：私も分野が違うが、科学未来館でボランティアをやっている。

野末副座長：今日お話を伺っていて、図書館で地域資料についてそういったボランティアの方がいると、こういう観光できたんですが、どこら辺が観光にいいですかねとか、この神社はこういった由来でねとか、本のコーディネートしてもらって、ボランティアの方に自然科学分野の書棚の前でウロウロしていただいて、利用者が手に取った瞬間に「それはね」って（笑）。地域のみなさんに、単に読み聞かせだけのボランティアではなく、そういうところで活躍していただくと、まだまだできること、図書館が地域に役に立つことがある。

小原委員：素案 P34 の久が原図書館長の報告がある。これは昨年実施した区民大学の講座の一環である。郷土博物館の学芸員の方にも出ていただいて、久が原図書館長にも出ていただいて、私も講師で出させてもらった。最後街歩きしましょうということで、11月の末ぐらいに街歩きしたが、毎回会場の久が原特別出張所に実際50名近く来られて、そこで来られた方が、特に久が原特別出張所は久が原小学校の一階に併設しており、その集会室で開催した。久が原小学校から2万5千年前の旧石器時代の遺跡が出ましたという話から話が繋がって、二か月に渡って開催された。最後に街歩きをして、久が原の街をずっと歩いて、そこにある建物、これはこういうお宅ですというのを聞いて、まだ現存しているんですね。毎回同じ話はできないので、ある程度ガイドする資料を常に懐に持っていないといけない。そういう形が図書館のボランティアとしていろいろな人達が集まっていたいて、いつでもいろいろなメニューが出せる用にできればいい。そういう方向に図書館

がなっていけばいいと考える。

大串座長：ボランティアについてはもう少し幅広く考えたほうがいい。

甲斐委員：ひところ前は学校に白羽の矢が立ち、開かれた学校と言われて学校にもっとゲストティーチャーを呼んだり、学校の教員だけではできないものをやると言われていた。今はやれ外国語活動だとかいろいろな事をやれと言っても教員はできない。だから地域人材活用とかなってきて、それは素晴らしいことだが学校がきちんと核を持っていろいろな人が学校に来てこういうカリキュラムの中で効果的な人を呼んで、コーディネート力が大事になる。だから図書館も図書館の中にコーディネート力、ボランティア活用力があり、それぞれの図書館同士や、地域の学校とのネットワークがこれから必要になる。私たちの学習指導要領も人工知能（AI）に私たちが勝てなかったら職業が全部乗っ取られるのではないかと（笑）とか、学校も一部企業に乗っ取られて、公務員が無くなってしまおうのではないかと。この子ども達が2030年になったときに、生きる力の術となるところを、図書館に行ったら生きる力がもらえるかもという場であるように学校と図書館といい形が、先ほどのお話でも中高生達がネット、タブレット、自分の知りたいものが一番知りたい時代が中高生の時代なので、そういうニーズのある図書館というのも考えていけるといい。

大串座長：公共図書館について、アメリカとか、これもIFLAのガイドラインに書いてあったのだけれど、ショッピングセンターに併設した図書館ができた。ここは端末ばかりで職員が付いていて検索方法の案内をする。今までの図書館の形態から離れたものがあげられている。いろいろなメディアといった点では高齢者向けの録音図書がたくさん出ている。夏目漱石のMP3版を買って、CD-ROM1枚を解凍してCD-ROM11枚組になる容量がある。延々と聞かなければいけない。途中で聞くことができない。電源を落としたらもう一度最初から聞くのか、いろいろなメディアが出てきて、図書館でも目を広げていただいて導入していただくことも必要になってくる。こういう時代も来つつありますので、本がなくてその他のメディアばかりだという図書館も将来出てくると考える。

パリの写真図書館は定点撮影しており百何十年同じ場所を撮影している。港区が同様の定点撮影を行っている。最近止めたみたいだが、日比谷図書館も一時定点撮影を行っていた。同じ角度で同じ街角を写真に撮り続けた。

図書館は我々が考えている以上にいろいろな活動をしてきた経緯が世界中にありますので、そういったことも視野に入れて将来のことを考えていただくといい。

図書館の運営について、東京で問題になっているのは本が紛失すること。本が紛失するのは日本の首都圏が多い。地方に行くとはほとんどない。百万冊借りても年間紛失する件数は100~200冊だと。多分大田区で無くなる冊数は1000~2000冊だと考えるが、将来にブックディレクションを導入することについて、あれは精神的なもので、業者に聞いたところブーと鳴るのは7割ぐらいであって、あとの3割は鳴りませんよと。あれは電磁波を飛ばすので強くすると利用者や職員に影響が出てしまう。首都圏に百貨店に併設された図書館があるが、電磁波の出力を強くしたら職員の半分くらいおかしくなった。あまり強くは

できない。IC チップを入れると鳴る確率は高まる。ただ精神的な効果のほうが高い。またいろいろもので鳴る。角度によってはバッチでも鳴る。精神的なものに留まるが、そういったものを含めて、運営面について将来について書いていただくといい。

運営面について、評価についてはあまり書いていない。大田区は過去比較的調査をよくしている。接遇や満足度の調査。継続してやるといい。将来つづけてほしい。

区民参加の図書館運営について IFLA のガイドラインでは中高生の本の所蔵についてアイデアを出した方がいいと書いてある。例えば中高生に実際に本屋に行ってもらって選んだ方がいいとも書いてある。

このへんで我々の話はお終いとして、これは懇談会ですので、報告書に取りまとめる際には区側の記録に残していただいて、素案を正案にするために意見として役立てていただくということになる。私達の話はこのへんでお終いにしたいと思う。

山中大田図書館長：懇談会は本日で終了。今後の予定としてこれまで頂いた意見を基に庁内検討会を 10 月 16 日に開催し、素案を基に原案を作成する。その後パブリックコメントを頂き、最終的な成果物とする。

水井教育総務部長：【お礼】大田区の図書館は本の貸出を行ったことで評価されたこともあった。昨今では本を貸すだけになっていないか。図書館には区民の生活や人の生き方を豊かにするという本来の目的があり、そのための図書館であることを改めて気づかされる会になった。ご意見はきちんと反映させていただく。

大串座長：日本の図書館も変わる時期で、国際子ども図書館では調べ学習のためのプロジェクトを作って、図書館を使って遊びながら図書館の使い方を学ぶプログラムを実施している。大田区も学びながら新しい図書館のやり方を考えていただくことを期待している。今回の懇談会はこれで終了とします。ご協力いただき有難うございました。

閉会 15 : 58